倭文織のルーツを尋ねて
『倭文織の源流を探る』に寄せて

先崎　ちひろ

一、倭文織調査の経緯

「町長。倭文織のことで町内のタクシー運転手の飛田さんが話したいと言っているけど」。一九九一年六月、町の経済課長からこんな話が飛び込んできた。早速飛田さんに話を聞いてみた。神戸の古代布の研究家が静神社へ来た折、タクシーに乗り、その中で兵庫県のある学校で倭文織を織っている、と聞いたと言う。彼はまた古代史に詳しく、神様の系図を取り出し、静神社の主祭神である建葉槌命の関係などを説明してくれた。

瓜連町内にある静神社は常陸二の宮、。水戸藩の祈願所であった。近郷では「お静さん」として名が通っており、私の子供のころの秋祭りは学校が休みになり、今では想像も出来ないほどのにぎわいだった。

その祭神は建葉槌命、織物の神様だと聞かされていた。また「常陸風土記」久慈郡条にも「静織里　上古之時　織綾之機　未存知人　干時　此村初織　因名」(しづおりのさと　むかし　あやをおるはたを　しるひとがいなかった　あるときに　このむらで　はじめて　おった　それで　なづけた)という記載があり、このあたりで昔しづおりという織物が織られていたことも知っていた。

さらに、そのしづおりというのは「栲(たえ)、麻、苧(からむし)などを材料として、その緯を青、赤などに染め、文に織った布」であるという辞典などの定義を目にしていた。

だから、しづおりという織物は昔のもの、歴史上のものという感覚が私の頭の中を支配していた。ところが、兵庫県で実際にそれを織っていると聞いたとき、「アッ、先を越された」と一瞬思い、それではそれを見てみよう、と考えた。

ところが飛田さんはその大学の先生の名前も、どこで織っているのかもわからないと言う。そこで地図を買ってきて、それらしき地名を探していった。やっと見つけたのが淡路島の緑町。町役場に電話をかけて調べたら、緑町の倭文(しとおり)小学校で昭和六十三年度(一九八八年)からしづおりの再現に取り組んでいることがわかった。

素材は、自生の楮(こうぞ)を横糸にし、縦糸は苧を使用しているという。織機は学校内で考案した簡易織機で、小学校低学年の児童でも操作が出来るものである。

この年の夏、消防関係の全国大会が大阪で開かれたので、その帰りに淡路島に寄り、倭文小学校でその織物を見せていただき、また緑町役場の西東企画課長(当時)から彼の集めた倭文織関係の資料をコピーしていただいた。

一九九一年十二月には教育長、小学校長ら六人が緑町を訪問、倭文小学校や町教委関係者らの話を聞き、次年度から小学校でしづおりに取り組む、倭文小へ児童を派遣し、交流を深める、などのことを決めた。

この頃瓜連町ではふるさと創生事業の一環として人材育成事業をスタートさせ、一般の人たちとは別に小学校を対象にしたルネッサンス運動、中学生を対象にした国際ふれあい事業が始まることになった。ルネッサンス運動は、子供たちに自らの郷土を再発見してもらうのが目的である。

子供たちが最初にしづおりに取り組むことを決めたが、それではその織機をどうするか、誰が指導するのかが次の課題となった。たまたま私の友人が桐生で織物参考館をやっているのを知り、彼に相談、そちらの方から二台借り、技術者が指導に来てもらう、楮は秋にならないと採れないので、それ迄は木綿で練習する、楮は緑町倭文小と同じように細かく裂いてボンドでつなぐ(よりはかけない)、などがその内容である。

一九九二年四月、瓜連小学校に十一人の児童によってしづ織クラブが誕生した。全国初である。そのクラブのメンバーがこの年の夏休みに倭文小を訪れ、楮の皮はぎ、皮裂き、織機の操作などを教わってきた。

私は子供たちの小学校訪問の合間に緑町役場西東課長の案内で楮の織物を織っているという徳島県穴吹町を訪問し、その工房を見させていただいた。ここでは楮を使って織ったものを南京袋の代用に使っていたが、戦後すたれて、途絶えていたものを最近復元したという。同じ徳島県の木頭村の太布の系列に属するもので、倭文織とは違うのではないか、つながらないのではないか、だが織り方については参考になると感じて帰ってきた。

翌一九九三年、茨城県は県版ふるさと創生事業(茨城県市町村振興事業)を始めた。私たちはこのうち「個性的で魅力

ある地域づくり」に倭文織復元、活用推進事業を導入することを考え、県から四〇〇万円の補助金を受けることができた。ここで初めて倭文織のルーツ調査を専門家に委託しようという考えが具体化することになったのである。この事業では同時に楮、苧、麻、染料の植栽、技術指導者の養成と委託、織機の設置などを行った。

これより先、一九九二年四月、私たちは木造校舎と体育館の建設を進めていたが、その緞帳の製作を京都府の㈱川島織物に依頼してあり、その織り具合を見るため、川島織物を尋ねた。その時に対応してくれたのが、川島織物史料室長代理の高野昌司さんだった。

事前に来意を告げてあったので、最初に見せてくれたのが「潜龍閣蔵書印」と押印のある『御装束織文裂本』の中の「太神宮御袍之地」の三枚の錦だった。「常陸国倭文地ナリ」と添書がついている。

この錦地を見せられた時、「おや、これは困ったな」と思った。なぜなら、しづ織は楮、苧等の植物性の素材をもとにした織物、ということが頭にあったからである。錦はいうまでもなく絹であり、その糸は繭であり、これまで考えていたこととはまったく違ってしまうことになる。

さらに追い討ちをかけるように高野さんは『魏志倭人伝』の「倭錦」の話を持ち出してくる。「倭文織が錦だったらどうしよう。素朴な織物だと思っていたのに。でもいいか。それなら徹底的に追いかけてみるのも面白いではないか」。そんなことをこの時考えていた。

アンテナを建てておけば、情報は集まってくるものだ。この仕事のきっかけとなった「神戸の古代史の研究家」の方から手紙をいただき、西宮市に住む崎山さんとわかった。崎山さんは高校教師を退職後、万葉集の研究をしており、万葉集に出てくる倭文部可良麿の歌碑を尋ねて静神社を訪れたのだ、という。

群馬県伊勢崎市にある倭文神社の近くに住む赤坂さんからも数多くの史料をいただいたし、静岡県金谷町長の孕石さんからは、金谷町の中に志戸呂という地名があり、「しとろ」は「しづか」から転じたもの、「しづり」は倭文織のことで、倭文部を置いた地のことだと教えられた。

静岡にはしづはた(賤機)という地名があり、しづはたが転じてしづおかになったという説を聞いたことがあり、その静岡(駿河)は常陸とならんで倭文織を献上していた。

現金谷町は遠江国に属しており、駿河国とは違うが、金谷町の郷土史には「衣服の料として樹皮草根の繊維を積みて夕へを織り草木の汁を絞りて染料となし赤青等様々の筋を入れて織り成しうる綾布をシヅリと云ふ」とあり、金谷町にも倭文織が織られていたことを知ることができる。

赤坂さんからは全国各地の倭文神社関係の史料、縄文時代の編布(アンギン)に関する資料、司馬遼太郎の倭文織に触れた文などを送っていただいている。

米沢市にある、原始布・古代織参考館の山村さんには何度もお目にかかり、植物性繊維から糸を績む技術などを教えていただいた。その他掛川市、福島県昭和村、新潟県山北町などを訪れ、葛布、からむし織、しな布などの織り方を教えていただいた。

三重県松阪では伊勢神宮の神御衣祭(かんみそさい)に使用する絹(和妙)と麻(荒妙)の織り出しも見せていただくことができた。

さて、さきに述べた本題のルーツ調査だが、私たちは事務上の都合で水戸市内にある㈱イトピックに調査事業を委託し、そこから専門家に依頼し、とりまとめるという形をとった。イトピックの出してきたフローチャートには次の項目が掲げてあり、ルーツ調査はその最初の仕事、という位置づけである。

⑨ ルーツ調査
⑩ 織物全般の調査
⑪ 技術者、指導者の発掘、育成
⑫ 素材の確保
⑬ 教育現場の確保
⑭ 町民参加の環境づくり
⑮ アトリエの建設
⑯ 販路の確保
⑨ PR活動
⑩ 自然資源(八重桜、白鳥)との関連づくり
⑪ 歴史と関連づくり
⑫ 観光との関連づくり(イベントを含む)

このうち現在までに取り組まれているのは小学校でのしづ織りクラブ、中央公民館でのしづ織り教室、静峰公園での楮などの育成である。

ルーツ調査は、歴史、民族、織物の分野から専門家に依頼することとし、茨城民俗学会代表理事の藤田稔さん、㈱川島織物資料室室長代理の高野昌司さん、茨城県立歴史館史料部史料室主任研究員の斎藤真人さんの三人が一九九三年十二月に第一回の調査会議を開いた。

それから二年余、やっと『倭文織の源流を探る』がまとまったのである。以下、その報告書の要旨と今後の課題についてまとめてみた。

なお、しづおりの表現については、断りない限り「倭文織」としている。

(「常陽藝文」 一九九六／五月号に関連記事が掲載されているので参照されたい)

二、倭文織とは

1　倭文織誕生の背景

「人間は原始時代から衣服を着用していた。衣料に用いる材料は、生活の周辺にある動物の毛皮や、植物の類であり、人知の進歩とともに織物が始まった。わが国の場合、縄文時代の布は、タイマ(大麻)、アカソ(赤麻)、チョマ(苧麻)など草皮繊維を用いたとみられ……紐を編んで布状にし、衣類として用いたと考えられる」(藤田、報告書四頁。以下報告書からの引用は頁数のみ記す)。

編んだ布、即ち編布(アンギン)は縄文時代前期に始まったとされており、近世から近代にかけて新潟県魚沼、頸城地方で製作、使用されてきたことがわかっている。さらに縄文中期にはアンギン編機様の機具を使って、「編み」から「織り」への転換が行われていた(斎藤。八三頁。原典は布目順郎『倭人の絹』、一九九五、小学館。一六～二四頁)。

弥生時代になると、「稲作りとともに大陸から織物の技術が伝わったとみられる。フジ(藤)、コウゾ(楮)、シナノキ(科、楓)、カジ(穀)などの樹皮繊維が発見され、織布が発見され、織布の断片や機織具の部品、紡錘車なども各地から出土する」(藤田、四頁)。

その織物は、苧麻などの植物繊維の布と蚕から採った動物繊維の絹であり、『魏志倭人伝』には二四四年に卑弥呼が魏国へ「倭錦」を貢納した、と書かれている。倭錦とは「三色以上の彩糸紋用に織り込んだ縞様の織物と思考され、倭国では最初の錦で、当時中国に無い非常にめずらしい織物で、倭国の錦『倭錦』と称したのであろう」(高野、三五～三六頁)。

瓜連地方においても、弥生時代後期の遺跡から、麻または他の植物性繊維で織られた織物があったことがわかっている(高野、四四頁)。そして『常陸国風土記』には久慈郡太田の郷で絁(あしぎぬ)を織ったことが記されている。

常陸国へ養蚕が伝播したことについての伝説が三つある。

1　筑波山麓の豊浦の蚕影(こかげ)神社
2　鹿島郡神栖町日川の蚕霊(さんれい)神社
3　日立市川尻町の養蚕(こかい)神社

いずれも、海上の道によって伝播したと伝えられ、常陸国には早くから絹文化が栄えていたといえよう(藤田、九～一〇頁、高野、五五～五六頁)。

2　倭文織の誕生

やまとのあやおりと言われる倭文織の存在がわかるのは、『常陸国風土記』によってである。さきに触れたように同書には「郡西十里静織里上古之時織綾之機未在知人干時此村初織因名」と記されている。

では瓜連地方になぜ「しづおり」という織物が生まれたのだろうか。その技術はどこから来たのだろうか。この点については藤田檢氏の論証が詳しい。労をいとわず紹介しておこう。

「瓜連地方には大和朝廷成立後、逸早く中央文化が伝わった。高度な織物技術も伝えられた。従来の原始布に改良が加えられ、新たにしづ織が生まれたと考えられる。なぜ逸早く中央文化が瓜連地方に伝わったのであろうか。

日本文化は、西から東へと伝播した。中国・朝鮮から北九州へ、北九州から大和へ、さらに東日本へと伝わったが、古代常陸へは東山道経由による内陸部からと、黒潮に乗る海上の道による経路があった。瓜連地方には、特に後者、すなわち海上の道によって北九州から直接高度な文化が伝播し、織物技術も影響を受け、しづ織が生まれたのではないかと考える。

北九州は朝鮮半島を経由してくる大陸文化と、有明海に入る南方文化との結節点である。そこには高度な文化が生まれ、優れた織物技術があった。その北九州からどうして、直接、瓜連地方に文化が伝播したのであろうか。

いまからおよそ一五〇〇年前那珂川流域一帯と鹿島・行方地域は、大和朝廷の支配する那賀(仲)国となった。その長である国造という役職に任じられた人が建借間命(タケカシマノミコト)である。建借間命は、古代氏族の多氏に属するとの説が有力である。

古代常道には大和町廷によって六国が設けられた。高国・久自国・仲国・茨城国・筑波国・新治国である。常道六国の一つ仲国(那賀国)の国造に任じられた建借間命は古代の多氏一族で、その本貫地は北九州火の国、いまの佐賀県杵島山周辺とする説が有力である。

建借間命は……那珂川に入り、飯富や渡里の台地(現水戸市)を拠点とし、……那賀国を統治した。

高度な文化を持った北九州の多氏一族が那珂川流域を支配したのであるから、当然先進的な織物技術も伝播したであろう。瓜連地方は久自国に属したが、那珂川に極めて近い位置にある。従って、西日本からの先進文化が早く伝えられた。原始布の盛んであったところへ、先進技術が導入され、高度な織物としてのしづ織が誕生したのではなかろうか。

高度な文化が古代中国から北九州へ、そして多氏一族が黒潮に乗って東国へ進出し、那珂川周辺に居を構え、瓜連地方に新しい織物技術が伝わり、高度なしづ織が生まれたと考えるのである」(藤田、一〇～一二頁)。

藤田氏の説に対して、斎藤真人氏は倭文織が絹製品なのか苧麻や葛などなのかによって分けて考えている。即ち、「絹製品の場合、養蚕の導入が中国方面の家蚕によるものであることを以て推測すれば、原料素材は、中国にルーツがあることとなる。その場合の伝播経路は、二系統が考えられる。一つは、北まわりで、朝鮮半島の新羅経由で、出雲周辺の地方を経て、おそらく陸地を進み東国へおよぶと考えるもの。もう一つは、中国南部の貴州辺に発して、揚子江周辺より、黒潮の流れによるもので、日本海よりも太平洋岸にもたらされると考えるものである。倭文が苧麻や葛の場合には……それらは在来種の植物から繊維を調達することが出来るので、原料素材の面では対外のルートを考えるにはおよばない。

織りの技術と道具については、どうしても中国からの導入を考えるほうが近道のようである」(斎藤、九三頁)。

なお、布目順郎氏は「中国に発生した養蚕は、弥生前期末以前のある時期に、華中方面から東シナ海を渡って、北部九州の地へ伝えられた」と推定している(布目、前掲書、三七頁)。

また藤田氏は中国貴州省で現在使用されている機がわが国の弥生機と似ている(藤田、一二～一三頁)と述べ、さきの海上ルート説を補強している。

この説とは別に国語学者の大野晋氏は『日本語の起源新版』(一九九四、岩波書店)の中で、日本語とインド・タミル語との比較検討を行い、日本語のルーツは南インドにある、という仮説を立てておられる。その中で機織については古代の織機、ハタ、オル、アゼ、カセの言葉について日本語とタミル語の対応関係が説明されており、シツについてもタミル語のtettuに対応し、「日本語のシツが着物の生地としてよりも、鞍を作ったり、帯を作ったり、手に巻くくしろを作ったりするのに使われることが理解できる。つまりシツとは、袋物などを作るのに通した太い、粗い繊維を、編むように使ったことと解するとき、細い絹糸を織るアヤとの相違が明瞭となる」(大野、同書、一七二頁)と述べている。

この大野氏の説に対して、斎藤氏は現物がないので、「事実は、そうは簡単にいかない」と疑問を呈しておられる(斎藤、八四頁)。編むのと織るのとでは大きな違いになるので、大野氏説は更に吟味が必要であろう。

ところで、これらの技術の導入については、『常陸国風土記』の研究を長いこと続けておられる河野辰男氏は、「久慈国造物部氏が、その領内の殖産工業を振興するために、中央からその技術者を招いた」と推定している。

そして「これらの技術の伝授はすべて中国及び朝鮮からの渡来者によってなされたもので」、『古事記』『日本書紀』や『新撰姓氏録』という書物によると、応神天皇の時代に弓月君が百二十七県の氏を率いてわが国に帰化したことがみえ」、「それらの子孫は技芸民として秦氏を称し、雄略天皇の時には、各地に住む秦氏の民は九十二部、一万八千六百七十人を数え、次いで欽明天皇の代には、その戸数七千五十三戸であったといわれている」。「常陸地方の久慈の地にもたらされたこれらの技術も、雄略天皇以後、欽明天皇のころとみるべく、五世紀末期より六世紀にかけての時代と判断されるものである」と述べている(河野辰男『常陸国風土記の探求、中』、筑波書林、一〇五～一〇六頁、一九八〇)。

3　倭文織とはどんな織物なのか

しづ織（倭文織）とはどんな織物なのだろうか。実物が残っていないので、明らかではないが、素材、機、何に使われたのかを三人の論説からまとめてみよう。

倭文織については、『日本書紀』『万葉集』『延喜式』『常陸国風土記』などに記載されており、特に『延喜式』には頻繁に登場する。しかし、その素材は明らかではない。現代に下って、諸辞典などに説明があるが、「タエ、アサ、カラムシなどを材料として、その緯を青、赤などに染め、文に織った布」という点では共通している(藤田、十五頁)。

高野氏は多くの文献や関連出土品、古代の織物と繊維の変遷をたどっている。このうち瓜連町内で発掘された諏訪前遺跡、瓜連城跡(いずれも弥生時代)から出土した土器の古痕からいずれも材質は麻または他の植物繊維と推定、平組織で織られたものであった(高野、四四頁～四六頁)、と述べている。

そして、「奈良時代は苧麻の使用が多くなった。大麻は縄文時代末期アジア大陸から渡来し、弥生時代の出土品は大麻八〇％に対し、苧麻は二〇％と伝えられている。これに対して苧麻は大麻よりやや遅れて栽培されたが、白く丈夫でやわらかく。しかも光沢があるので、次第に大麻から苧麻への使用が増大していった」(高野、四七頁)。

一方絹は中国で約五千年前に発生したと伝えられている。わが国では弥生時代前期に養蚕、絹織りが始まったとされ、中国華中方面から養蚕技術が伝えられた(布目、前掲「倭人の絹」三五頁)。また錦は古墳時代のものは今日、数多く正

倉院や法隆寺に所蔵されている(高野、五〇頁)。

倭文織が絹織物ではないかという説がある一つの理由は、このような織物の発生史とならんで、伊勢神宮で現在も使用している「倭文御衣(しどりのみも)」の存在である。また、京都川島織物文化館には九代水戸藩主徳川斉昭のコレクション)である『御装束織文製本』が所蔵されており、この中に「太神宮御裳ノ地　常陸国倭文地ナリ」と説明してある三種の錦が収められている。この錦地は享和三年(一八〇三)二月に常陸国で織られている。

この「倭文地」は一〇世紀に「平安錦」として使用された織物であり、今日でも伊勢神宮で使用されている文様とほぼ同じである。

では、この「倭文地」と「倭文御裳」は同じものだろうか。「明治の御料と較べてみても現在の御料と些か趣を異にし……明治の末から昭和の初めにかけ国の機関により実施された古儀調査により現在の文様となった」。さらに詳しい調査の結果、高野氏は現在の「倭文御裳」は「組織的には古いものとは考えられない、明治以降考案された織物である」と断定している(高野、六五～六七頁)。

そして高野氏は織機の変遷をたどった上で、倭文織とは①素材は苧麻(苧麻は大麻より丈夫でやわらかく、しかも白くて光沢があるので、彩の染色、発色性に優れている。従って大麻より苧麻の使用が多いと考えたい)、②青、赤などの色糸を経糸に(『釈日本記』に「有青筋文布」とある、また『上代日本染織史』に「条布即ち縞織物である」との新聞記事がある。従って青を主体として赤、白、黄などの彩糸を経糸に用いた織物)、③筋織(経縞)の平織地(『新編常陸国誌』に「倭文ト云義ハ、筋織ノ約マレルニテ今世二云島織ノコト」とし、「大言海」では「倭文は線(筋)の転化なり」としている。これらは正倉院宝物の平織の不規則な経縞「雑彩交織裂」に通じる織物であろう)、④線の折れ曲がった経糸の山道文を綾組織とし(『常陸国風土記』に「……静織里上古之時　織綾之機　未在知人　干時　此村初織……」とあり、綾を織る装置(綜絖)を用い、山形文や菱文でなく、経線の折れ曲がった山道文を、しかも縞経がよく表現できる経糸表面の山道文を綾組織で織る)、⑤乱れたような紋様になる麻織物(平安時代の和歌集に「乱れたような文様」とし、経糸山道文綾の組織で、多彩な経糸と緯糸が交錯した乱れた文様の麻織物と考えたい)、と結論づけている(高野、七一頁～七二頁)。

高野氏はまた、倭文織が絹織物ではないことを。静岡県富士宮市の倭文神社の伝承から立証している。

即ち、富士宮市星山にある倭文神社の創建は古墳時代まで遡れ、他の神社より早い時期のものである。更に『日本書紀』によれば、西暦六〇〇年代に大生部多(おおふべのおお)たちが養蚕を組織的に拡大し、大和朝廷からの独立性を打ち立てようとした。しかし大生部多は秦河勝によって討伐された。この秦氏は養蚕、絹織物を独占したと考えられ、倭文部は蚕、繭ではなく、苧麻を使った織物に携わっていた。と推定している(高野、五四～五五頁)。

高野説に対して斎藤氏はその素材について次のように分析している。

「「倭文」織の素材については、植物性繊維の仲間から大麻、葛、梶(楮)、藤、科などを、動物性繊維では蚕による絹を、というように数種をあげることができよう。その中で、繊維が細かく、長く、いわゆる上質な織物を作れる素材は、と考えると、絹、苧麻、葛の三種類をあげることができよう。

苧麻は、わが日本の全国に分布し、葛もまた日本の全国に分布する、ということなので、絹生産の桑と蚕も全国で成育可能ということであれば、絹、苧麻、葛の繊維を利用するには、水の便のほかには地域の制約があまりともなわないといえよう。そして、素材の点で、気候と風土に関して地域を限定しなくても生産が可能ということであれば、「倭文」織は日本全国いたるところで生産が可能であった。

しかし「延喜式」のなかで見ると、「倭文」織は日本全国から生産貢納されておらず、特定の数国(常陸国、駿河国は毎年、特例として神事に際しての出雲国、紀伊国、淡路国、阿波国等は臨時)からの生産貢納に限られている。この現象はどう説明したらよいのであろうか。「倭文」織の生産は、素材の生産に地域性の制約が薄いということであれば、生産者の果たす役割が極めて大きいのであろうか。

「倭文」織の生産について地域性からみて、常陸国と駿河国では、おそらく現地に於いて素材を調達し、毎年の生産が行われたのであろう。これら両国の辺りで葛糸の生産が後世までみられたことは注目に値する」(斎藤、八四～八六頁)。

斎藤氏はこのように、高野氏とは違って、倭文織の素材を限定していない。

織機については、高野氏は原始織(弥生機)から高機(空引機)まで時代と共に変化してきたことを説かれ、当初は原始機(弥生機)を使用し、多綜絖絹機、絹機、高機も考えられる、としている。このうち多綜絖絹機は錦、綾の製作に使用され、六世紀後半、古墳時代後期には最も進んだ機なので、このような機で織った可能性が高い(高野、六九～七一頁)。斎藤氏は「倭文を作る技術の時代差において、先に編み技術の倭文が作られ、次に織り技術の倭文が作られ、地機系織機に進み、更に高機で作るようになった、このように考えうる可能性は残されているかもしれない」と榻む可能性を否定していない。

4　倭文織の用途と織られていた時期

平安時代初期の宮中の年中儀式や制度などを詳しく記した「延喜式」には神社の祭礼用倭文を使用したことが随所に見られる。藤田氏の説によれば、倭文織は第一に、神祭りの幣として重要なものであった。神祭りの幣として用いられる布は、在来の材料で作った古風なものであった。現在でも神事には麻が用いられるように、清らかなもの。魔除けとなるものである。奈良時代には倭文幣が用いられた。それは神聖なものとされたのである。第二に、倭文織は色彩美しく、貴人たちの装飾になるものであった。倭文機帯は貴人たちに重んぜられてきた。赤駒に倭文布で飾った鞍を置くことは、きらびやかなことであった。また、たまき(装飾用に手首に巻いた腕輪)を倭文で飾ることもあった。倭文は気品の高い、しかも美しい色彩の布であったことがわかる(藤田、一九頁)。

古代の文献には「倭文纏」、「倭文服」、「倭文幡」、「倭文鞍」、「倭文機帯」、「倭文幣」、「倭文纏刀」、「倭文手纏」などの記述がある。

「延喜式」巻第二十四には駿河国と常陸国から調としてそれぞれ三十一端を貢納していたことが記されている。その一端は広さが二尺四寸、長さが四丈二尺である。成人男子の正丁が三人で、倭文一端を作り、納めていたのである(斎藤、八七頁)。

大正十年出版の明石國助『上代日本染織史』に次の記述がある。

「最近に東京の諸新聞に報告せられた茨城県下那珂郡静村の一大古墳中より完全に数種の麻織物が発見された事は我国で類例のない事実で、上代染織史には稀有の史料である。今その発見の製布の詳細を知る事は出来ぬが、記事によると條布即ち縞織物であるらしい。古墳が何時の頃のものであるやを決定される迄は断案は下せないが倭文織若しくは倭文織の一種である事は疑ひないと思ふ」(同書、思文閣出版、一四六頁)。

この記事は現在のところ見つけられないでおり、また発掘されたものや報告書もないので断定はできないが、この記事から推測されるのは古墳時代に倭文織が織られていたということである。大和朝廷の支配地域が広がっていくに従って、部民制的生産機構に編成された倭文部が織った織物が倭文織、ということだと考えれば、倭文織の成立は五世紀から六世紀にかけての頃であろう(藤田、一二頁、高野、七二頁)。

では終わりはいつか。文献上は十世紀前期の『延喜式』の記載が最後であり、黒川真頼『工芸志料』(明治十一年刊)によれば、「承平天慶の乱あり。諸国調貢の典漸く衰え、遂に他物を以て代えて献ずるに至る」とあり、平将門の乱の頃には消滅してしまった、と考えてよいようである(斎藤、八八頁)。

その後常陸国では「倭文布」の技術で絹製の「綾」を製作し(『新猿楽記』)、その技術を継承し、後に絹技術は紬に受け継がれた(『庭訓往来』、高野、三九～四〇頁、七三頁)。

5　倭文部と倭文神社

倭文織を織った部民が倭文部である。『万葉集』には防人に召されて常陸国から出征した「倭文部可良麻麿」の長歌が載っている(巻二〇、四三七二)。また茨城県石岡市の鹿の子C遺跡から発見された漆書文書には戸籍とみられる記載があり、この中に機織にかかわる部姓として倭文部が出てきている。

従って、この地域において「倭文部は高度な倭文を生産する専門的技術者であった。この倭文部の奉斎した神が静(倭文)神社である。静神社にまつわる神は倭文神(建葉槌命)である。この倭文神と倭文部氏の分布は、山陰、東海地区に集中していたり、海、河川に隣接しているものが多いことが注目される(図参照、藤田、二〇頁、斎藤、八九～九〇頁、なお全国の主な倭文神社については藤田、二二～二七頁)」。

では、倭文部氏はすべて倭文織を織っていたのであろうか。必ずしもそうではないと斎藤氏は主張している。

「より限定された地区に住む倭文部が、倭文の生産を行っていた、と推定されるのである。その上で、特定の地区が指定を受け、すなわち常陸国と駿河国から倭文が調として毎年納められ、淡路国ほか特定の地区から臨時に倭文が献上されていたのではないか」(斎藤、九〇頁)。

6　問題点と今後の課題

倭文織が現存していないというのが今回の調査のネックとなっている。しかし、文献を含め、倭文織の研究については大きな成果があったといえよう。その上で、今後なお研究すべきことなどを整理しておこう。

倭文織の素材や織機などの調査はさらに進めていかなければならないが、なぜ他の所ではなく静神社周辺にある地区ですべて倭文織が織られていたのか、平将門の時代になぜ消えてしまったのか、まだまだ解明すべき点は残されている。『上代日本染織史』にある大正期の新聞記事も見つかっていない。

常陸国と同様に毎年調として貢納していた駿河国の状況(静岡の地名を含めて)が全然つかめていない。

さらに、全国各地に存在するしどり関連の地名や(倭文、静、志鳥、志戸呂など)しどりに関係する姓もかなりあるので、その方面の研究も必要であろう。

こうした点の解明を進める爲に、倭文織に関心のある人たちが集まって研究会を開催すること、関係市町村の倭文織サミット開催なども考えられることである。

倭文神社関係分布図

（筑波大・茨城大講師）

「耕人」第四号（定価一、〇〇〇円）

平成十年五月三十一日印刷
平成十年六月一日　発行

発行　耕人社
編集人　中川英治
　　海野廣志
発行人　石川誠
茨城県水戸市千波町二九番地
電話〇二九―二四一―一六八三
九七六七

製作　筑波書林
茨城県土浦市東真鍋町一―八
電話〇二九八―二四―三六六四